

名古屋大学地殻変動連続観測データの解析

Arranging the continuous observation data of crustal deformation collected by Nagoya University

仮屋 新一 [1]; 伊藤 武男 [2]; 山内 常生 [3]; 宮島 力雄 [4]; 奥田 隆 [5]

Shinichi Kariya[1]; Takeo Ito[2]; tsuneo yamauchi[3]; Rikio Miyajima[4]; Takashi OKUDA[5]

[1] 名大・環境・地震火山センター; [2] 名大・環境; [3] 名大・環境・地震火山・防災研究センター; [4] 名大・理・地震火山; [5] 名大・地震火山センター

[1] Rsch.Ctr.Seis.&Vol.Disas,Nagoya University; [2] RSVD, Nagoya Univ.; [3] RCSVDM; [4] Nagoya Univ; [5] RCSVDM Center.Nagoya Univ

<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/>

1. はじめに

名古屋大学では地震予知研究計画のもとに1960年代より犬山(愛知県犬山市)・豊橋(愛知県豊橋市)の2点において横坑方式による地殻変動連続観測装置の開発と基礎的データの取得を行ってきた。1980年代にはプレート沈み込み帯における地殻変動様式や東海地震に関連する現象を明らかにするために、静岡県牧ノ原地域(御前崎市)から岐阜県東濃地域(瑞浪市)にかけて新たに9点の観測点を設置し、合計11点からなる地殻活動総合観測線を設けた。名古屋大学は石英管伸縮計、水管傾斜計、精密温度計、ラドン計などの装置開発と総合観測を継続してきた。これまでに得られた観測データを整理し、近年持ち合わせている知識と手法を活用し、過去のデータの見直しを実施する。

2. 経緯と挑戦

データの蓄積や開発が進められるに従い、横坑方式による地殻変動観測はきわめて局所的かつ地表の擾乱源(気象変化や人間活動)の影響を大きく受けていることが明らかになり、本来の目的であった東海地方における地殻変動様式を解明するためのデータとしての利用は困難であることが明らかになった。名古屋大学では過去30年以上にわたり連続記録の収録を継続してきたが、蓄積されたデータの整理や解析は十分に進んでいるとは言えなかった。

今回、過去の記録を整理し、これまでに明らかにされた現象の検討や再現、明らかにされていない現象の検出や抽出、最近東海地方で繰り返し発生していると報告されているスロースリップイベントに対応する記録の評価を試みる。